
異世界ライフはさぁ大変 【番外編】

樂阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ライフはさあ大変 【番外編】

【著者名】

ZZコード

1

【作者名】

樂阿

【あらすじ】

本編に入らなかつた分をちまちまとアップしていく予定です。
不定期更新です。

大きく振り回した耳と尻尾が見えました。

一
え

幻ですけれども

モウシ

あけに取られて、いる間に思ひ、わざ抱ひこみられて、しまひて

「可哀想に、ハル。あんな奴に預けるしかなかつた俺を恨んでい

「…か？」

苦しい。

だけど力を緩めることなく。

ପାତ୍ର - ୧

暑い

苦しい

この馬鹿力はどうにかならないものか。

「此処にこなかつたから起こつてゐるのか?だが、あいつ等が駄目だと言ひ

張りて……ああ、こんな心地いい音で来なくてはたった

「……何をしている」

低い……地を這うかの重低音の声。

「今は天使に見えるよ、ジーケフリー
ト・ハルに会いにきたに決まつていいる」

卷之三

わいに抱かしめられ……。

もう少しでお花畠が見えそうです。

一度もあつた!」とはないね」と一さんとおかーさんとが手を振つてい
るよつた気
がします。

「私は、何をしているのか、と聞いているんだ。……こんなジークフリートは見たことなかつた。眉間に皺がこれでもかと寄つてゐる。

隙があれば相手を殺すかのような激

「何だと？ 大体、お前がハルをこんな眼に……」

「馬鹿だ、馬鹿だ、とは思っていたが……。お

とが全く頭

に入らなければいけないかな？」

「……はん！詰がお前の血ハリとに耳を貸すか？」

馬鹿たが

△分からなくて仕方なしのかもしれないかな? もう一度言いておぐが、ハ

川柳が食まされておいてたつた毒は複雑なもので
時間がかか
その解毒には

るといふたはすだ。安静が必要なことも、

「ぐう」

「解毒薬も一步間違えれば猛毒になるほど強力なもので、特に光

は厳禁だと

も言つたな?」

「ううう」

あ、犬耳と尻尾がしな垂れできましたよ。

一 時的に体に麻痺の症状が出るが、完全に解毒できるまでは飲み続けなけ

ればいけないことも、だ

「……」

「言つたな？」

「……ああ」

「犯人が見つかるまでは安全のために離宮で過ぐ」していただくな
とも、犯人
を油断させるために敢えて接触できるのは最低人数にすることも
……。何か
あればすぐに知らせるから大人しく囮として政務をしつかりこな
せとも言つ
たはずだ！」

「……ああ」

抱き抱える男の尻尾が見る間に垂れ下がつていぐ。
「……」

「だいたい、きちんと政敵を把握し切れなかつたお前がそもそも
の原因だろ
うが！違つか、シリル皇帝陛下」

あ。

あは。

あははははははっ。
やつぱりおじさんでしたか。

非常識振りがよく分かりました。

……でも、まあ。

そろそろ助け舟を出さないとね。

「……いー」

「……如何なさいました？ 我が君

「……う……あれた……（疲れた）」

ジークが振り返つて。

「……少しお休みなさいますか？」

苦しそうにしていたから。

ううたえたんだろううね？

多分。

シリル叔父さんは……思いつきり私を抱きしめてくれたのだった。

「だ、だ、だ、大丈夫か、ハル」

「一回感、故ナ。殿下が苦 バガヒニ

「…………あ

半刻近く抱きしめられたままだつた私は。

最後に加わった力に耐えられず、再び意識を手放すことになったのだつた。

【教訓】何事も程々がいいという事。

番外編？（後書き）

シリル皇帝陛下の属性は犬です（笑）
本編に入れると話がいつまでも始まらない（序章が長くなつて）ので
こちらにいれました。

……はあ。

全く少しも落ち着きがない。

あちらを見たかと思えばすぐ別のものを見る。

それも、殆ど食べ物ばかりだ。

串焼きなど買ってどこで食べようと思つておいでなのやら。昼食は人の2倍はお食べになられて筈なのだが……。

成長期とはいって、自分はあれほど食べていなかつたはず……。
ああ。

今度は飾り飴に気が付かれたらしい。

どんなに綺麗でも所詮飴……砂糖などの固まりだところのやう。

……仕方ない。

後で宿の方で飴を手配するか。

2年前。

毒を服用していた殿下は急に倒れ、もう少しでお亡くなりになる所だつた。

皇帝シヒルからの連絡を受け駆けつけたときは体を動かすほどいか、自分で意思を表示することもままならないほどだつたといつた。

どんな馬鹿が毒なんぞ毎日飲んでいたのかと思つていたら。（な

にしろ皇帝が

あいつだからな）

1年間の回復期間にかなりの努力をして、今では殆ど副作用は見られない。

かなりの努力家だ。

それに、僅か12歳になつたばかりだというのに積極的に政務に

参加しよう

とする姿勢はすばらしい。

やつに爪の垢をせんじて飲めといいたい。

……現在は一部とはいえ、宰相と俺の確認を受けながら、だが、重要な政務を行つようになつてきている。

いくつかの法令やアイデアなどは大人も舌を巻くほどだ。
将来が楽しみだと、若干頬が緩みそうになるが。

次の瞬間殿下の見ている物を見て、再び頭が痛くなつた。

頼みますから、一国の皇太子殿下が“ワームリア（大蛇）
の蒲焼”なん
か食べよつとしないで下さい。

まつたく。

市場にいる間気が抜けない。
早く宿に着かねば……。

思わず歩く速度を進めるのだった。

番外編？（後書き）

市場でのジーク視点です。
変なものを食べないよう元気を張っています。

その方に御逢いしたのは一年前だった。

白銀色の髪。

深緑色の瞳。

その肌は透けるように白く。

その唇は赤く。

愛らしい顔立ちは、宛らブラン・シュネージュのようだ。

「あなたが毒を作り出してくれた人？」

……一年前。

孫を囚われ、否応なしに手伝わされた。
それが殿下の命を奪うものとは知らずに。

いや。

知つても作つていただろう。

可愛い孫を取り返すために。

陰謀は明らかになり私は捉えられた。
警備隊が到着したとき孫はすでに死んでいたと、知らされた。
もう、何も考えたくはなかった。

「何か言つことはあるか」

殿下の傍らにいるのはブリーゼ卿……。

私の作り出した恐ろしいものを無毒化させたという。

この方がいるのならば大丈夫だらう。

「いいえ。いま、ただ、死を賜りますことを願つております

これが最後の願い。

「い・や」

は？

私は緊張しているに違いない。
だからありえもしない幻聴が聞こえてくるわけで。

「い・や」

「好きにしていいって言つたよね？」

「……御意」

「じゃあ、この人、僕のにする」

「は？」

「僕のそばでお仕事してもらいつ

「……殿下？」

「ん~。ぼくの、忠実な下僕という事にする」
「微かに」「殿下、それは……」や「法務省が……」などが聞こえてくる。

聞こえでは、くるが。

最終的に。

殿下はカーテイス・エセルギア・D・ファレルを如何するのか押し通された。

そして。

ハロルド・K・ウイラウス・ヴァイセエスリヒト皇子殿下は忠実な下僕を一人手に入れました。

番外編？（後書き）

カート視点の出会い編。
この後ジークと意氣投合します（主に薬学方面で）

まあ。

取り敢えず。

せつかく過保護ジーハクとカーネな保護者イコール＝お邪魔虫イコールとも言つ……がいないので。色々弄くつてしまおつ。

今回の収穫品を田の前の大き目ハシカチもじきの布切れにぶちまける。

えーと。

『成長促進』『品質向上』あとは『病害虫予防』……かな？

「んじゃ。』『おおきくなれ』』

ぴし。

光の渦が小さく辺りを包む。

……術が発動したのはいいけど。

お腹が空きました。

言い忘れていたけど（誰に）といつのは突つ込まないようだ。

この世では魔術が存在する。

全員が使えるわけじゃあないけれど、1／3くらいは素質があつて。

さらにそのうち10人に1人くらいが魔術師になる。

多いのか少ないのかはよく分からぬけれど。

魔術は系統として主に地・水・風・火・金属性に分かれていって、

勿論、魔術

師ギルドなんもある。

必要に応じてギルドを通して依頼することが多い。

……ちなみに私が使っているのは魔術ではありません。じゃあ、何か、ということになるのだけれど。

宮殿内の書庫のさらに奥に隠されている禁術書庫というものがあ

つて。

病気（とゆうか毒なんだけどね？）療養中で動けない時間が長くて、暇で暇で仕方なかつた私は、書庫の本を読み漁つていまして。その禁術指定書の中にチョロリつと（ほんと、ごく僅かに）書き記されていることを信じれば、だけど。

真術を使えます。

魔術とはどう違うのかといえば“よく分からない”が正しい。まあ似て非なるものらしい。

この真術、魔力を使う魔術とは違つて（魔力は寝たら一定量回復する）、精

神力を使つらしく激しく疲れます（寝ても回復されないから）。まあ。

想像力と精神力だけで何でも出来てしまつチートな力には違いなけれど。

一回使つた後激しく疲弊した私を見て、ジークとカートに使うのを止めさせられました。

今はそこまで疲れないんだけど、使つたのがばれたら過剰反応したみたいに

お小言の嵐が始まるので、現在は隠れてしか使えない。

徐々にばらしていくつか正々堂々と使えるようになるといなあ。

番外編？（後書き）

主人公の秘密その1です（笑）

真術は後々本編で出していく予定です。

ハルは主に自室でこつそり使つてます（頻度は低いけど）。

本編第1章？と？の間の出来事になります

暑い。

暑いです。

いちめでしようか？

この暑さは。

……とことで。

扇風機を作りうと思っていたんだけれど。

その前にちょっとと思いついたことがあった。

薄めの上衣を用意して（比較的どの服装にも合わせられる）デザインのものだ）。

『通気』『除湿』『適温維持』……こんなものかな？

うーん。

でもどうせならもつと付加をつけよう。

『防刃効果』『防火効果』『防毒効果』『防滴効果』

うん。

こんなものだよね。

「まあこれぐらいで『防御特化快適な服』になつて」

うーん。

ミシツ。

パシユツ。

光が妙な音を立てて収束する。

うーん。

無理なのかな。

取り敢えず手近なナイフで突くけど穴が開きません。

うん。着てみよ。

.....ふふふふふ。

あはははは。

.....成功です。

この後、皆の分も用意しました。

番外編？（後書き）

第一章？と第3章？の間の話。

アルメイダ行きが決定した後。

何種類か組み合わせを変えて服を用意して。

そのとき会わせるアクセサリーも必要ってなつて、衣裳部屋から持つてきた
腕輪^{あいてむ}……。

何か呪われますよ、というオーラがひしひしと伝わってきてします。

でも呪いが何なのか分らない。

おまけに「デザインはか～な～り好みなんだよなあ。

何とかして呪いを解いて持つていきたいけどなあ。
もう……。

「まあ、ハロルド様。まだ片付けていなかつたのですか？」

「ん？ん？」

「綺麗ですわね。この腕輪」

そういうてリーナが手に取った瞬間。
腕輪が装着されてしまった。

「うえ」「あやあ

……どうしよう。

「痛くない？」

「痛くありませんわ」

ふむ。

「外せる?」

「はい」

腕輪がするりと離れる。

気のせいか……。

自動装着効果があるだけなのかもね。

よし、持つて行こう。

そう思つて腕輪を振り回しているときだつた。

手元がくるつて（わざとではない）腕輪が入つてきた人物のほうに飛んで

いつたのは、不可抗力だ。たぶん。

入つてきたカートにもつ少しで当たる、と思つた瞬間、それは起つた。

薄煙が辺りに充满し、様子が見えない。

……やばい。と思い始めた頃、煙が晴れてくれました。

逃げようと思つたのは次の瞬間。

カートの姿を見て。

……若返り……過ぎでしょ??

そこには。可愛らしい、10歳の男の子がいましたとさ。

見なかつたことにしたい。

【教訓】後悔先に立たず

番外編？（後書き）

カートが10歳になつてしまつ話です。
まあ。カーとは差ほど驚かずに現状になじんでしまいますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6907t/>

異世界ライフはさあ大変 【番外編】

2011年6月8日15時14分発行